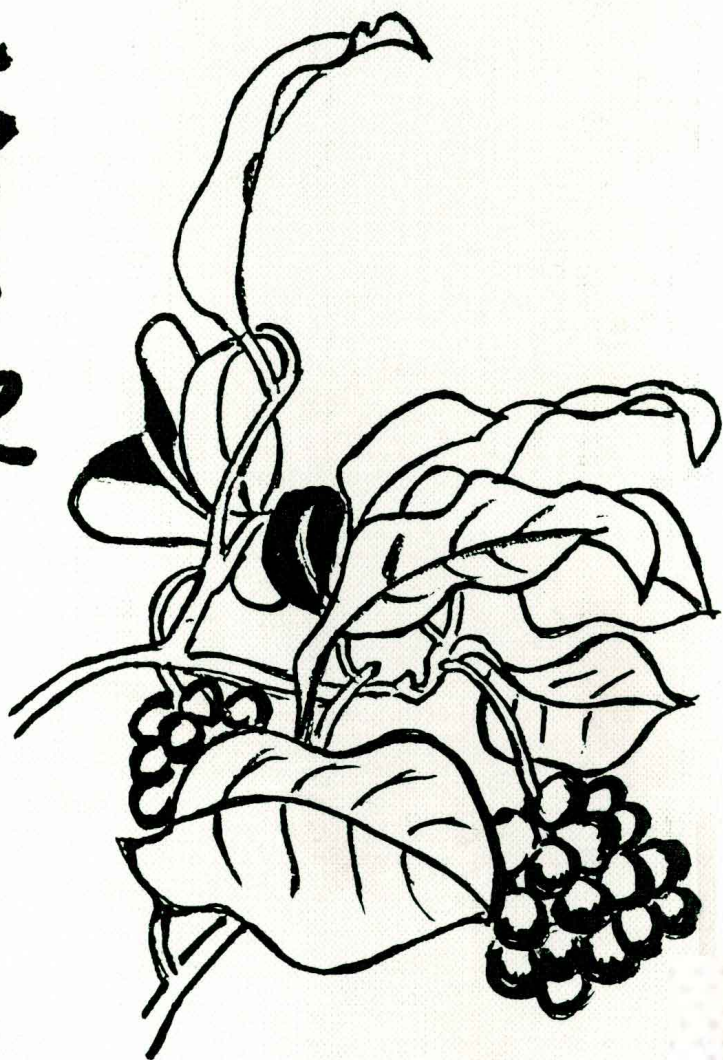


一木一草の記





# 著者略歴

吉川翠風 すいふう 本名：利雄 としお 雅号：利洲・翠石  
 昭和2年神奈川県中郡大磯町に生まる  
 昭和20年県立平塚農業学校（現平塚農業高校）卒  
 昭和23年官立東京農林専門学校（現国立東京農工大学）卒  
 昭和41年より県立平塚農業高校教諭

著書：句集 石路の花

現住所 〒259-01 神奈川県中郡大磯町生沢1176

## 一本一草の記

昭和五十八年一月十五日印刷

昭和五十八年一月二十五日発行

定価 一五〇〇円

著者 吉川翠風

発行者 山田恒雄

発行所 丸井図書出版株式会社

〒220 横浜市西区北幸一―四―一

横浜天理教館ビル21F

Tel〇四五―三一九―三二八四

印刷所 有限会社コニー

〒231 横浜市中区寿町一―一―十一

興和ビルB1

Tel〇四五―六六二―三五四三

一木一草の記

吉川翠風著



## 序

本書「一木一草の記」は、草木の名前や各地方の呼び名（方言）など、また自生しているところや開花の時期、姿などの解説、それに山野の草木を季題として俳句の好事例までも記されています。

このようなことは、誰もが知りたいことだと思います。本書は、文平易にして懇切丁寧な解説がなされ、読み物として大変楽しいものです。

著者翠風君は、大磯に生まれ、東京農工大学農学科を卒業と同時に、家業の農家を継ぎ、園芸経営を志し、この間、多くの受賞をされました。これらの経営技術が認められ、平塚農業高校の教諭として、特に要望され、現在に至っております。

また、翠風君は大磯鳴立庵句会の会員となり、村山古郷先生から俳句の指導を受け、先生より四季の山野草木について執筆を依頼されたようです。

私は、翠風君から俳誌「嵯峨野」に一木一草の記を、一年間連載する話を聞きましたが、これは、俳句の季題に関連する植物についての解説でありました。この連載は、

俳句は勿論、短歌、生花などを志す方々にも必ず役立つことでしようと、話しましたところ、友人にすすめられ、これを是非、一冊の本にまとめてみたいということで、私に序を求められました。一木一草に心を寄せらるる翠風君は、専門分野とは言い、かたくななまでに真摯な態度で、調査研究し、その成果を執筆されております。

本書を読んで野や山を歩くとき、ちよつとした草木が目にとまり、その自生の姿、花と葉、茎など土地との関係などから美しさがみいだされ、心の慰めともなるでしょう。自然を鑑賞することにより郷土愛をかん養する意味からも大変喜ばしいことであります。

これらの要望に応える好著として本書が広く皆さまに愛読されますことをお祈り申し上げます。

間 宮 宗 宏

# 目次

## 一木一草の記

|             |      |    |
|-------------|------|----|
| 序           | 間宮宗宏 | 3  |
| 一月(睦月)      |      | 9  |
| ふくじゅそう(福寿草) |      | 10 |
| つくばね(衝羽根)   |      | 14 |
| かんあおい(寒葵)   |      | 17 |
| たびらこ(田平子)   |      | 21 |

|    |                 |
|----|-----------------|
| 25 | すいせん(水仙)        |
| 29 | 二月(如月)          |
| 30 | かたくり(片栗)        |
| 34 | まんさく(万作・金鏤梅)    |
| 37 | おおいぬのふぐり(大犬の陰囊) |
| 41 | れんぎょう(連翹)       |

|              |    |
|--------------|----|
| うらしまそう(浦島草)  | 72 |
| 五月(皐月)       | 71 |
| おきなぐさ(翁草)    | 67 |
| うぐいすかぐら(鶯神楽) | 64 |
| くまがいそう(熊谷草)  | 60 |
| 四月(卯月)       | 59 |
| ははこぐさ(母子草)   | 54 |
| あせび(馬酔木)     | 50 |
| ひとりしずか(一人静)  | 46 |
| 三月(弥生)       | 45 |

|             |     |
|-------------|-----|
| しろやまぶき(白山吹) | 76  |
| おどりこそう(踊子草) | 79  |
| えごのき(えごの木)  | 83  |
| 六月(水無月)     | 87  |
| ねじばな(振花)    | 88  |
| ほたるぶくろ(螢袋)  | 92  |
| はないかだ(花筏)   | 97  |
| うつぼぐさ(靱草)   | 100 |
| 七月(文月)      | 107 |
| やぶれがさ(破れ傘)  | 108 |



|               |     |                |     |
|---------------|-----|----------------|-----|
| またたび(木天蓼)     | 112 | むくげ(木 槿)       | 150 |
| げんのしょうこ(現の証拠) | 116 | おけら(蒼 求)       | 153 |
| 八月(葉 月)       | 121 | いぬたて(犬 蓼)      | 157 |
| へくそかずら(屁糞葛)   | 122 | まんじゅしゃげ(曼珠沙華)  | 161 |
| ふよう(芙 蓉)      | 127 | びなんかずら(美男葛)    | 166 |
| おもだか(沢 瀉)     | 130 | 十月(神無月)        | 171 |
| やえむぐら(八重葎)    | 135 | しおん(紫 苑)       | 172 |
| たますだれ(玉 簾)    | 141 | むべ(郁 子)        | 175 |
| 九月(長 月)       | 145 | ほととぎす(杜鵑草・時鳥草) | 179 |
| やぶじらみ(藪 虱)    | 146 | とりかぶと(鳥兜・鳥頭)   | 183 |

|         |     |          |     |          |     |              |     |          |     |         |     |          |     |
|---------|-----|----------|-----|----------|-----|--------------|-----|----------|-----|---------|-----|----------|-----|
| あおき(青木) | 208 | がまずみ(莢蓬) | 205 | やつて(八っ手) | 202 | むらさきしきぶ(紫式部) | 198 | つわぶき(石蓂) | 194 | 十一月(霜月) | 193 | こすもす(秋桜) | 188 |
|---------|-----|----------|-----|----------|-----|--------------|-----|----------|-----|---------|-----|----------|-----|

|     |            |          |            |         |
|-----|------------|----------|------------|---------|
| 225 | 221        | 217      | 212        | 211     |
| 跋   | ひいらぎ(柊・疼木) | ろうばい(臘梅) | やぶこうじ(藪柑子) | 十二月(師走) |

睦

月

す た か つ ふ  
い び ん く じ  
せ ら あ ば ゆ  
ん こ い ね そ  
(水) (田) (寒) (衝) (福)  
平 羽 寿  
(仙) (子) (葵) (根) (草)

## 福寿草

きんぼうげ科の多年草で、昔から正月に飾る鉢物として、新年を祝う気分にぴったりの花である。

地近く咲く花の姿は、大地に幸せ一ぱいという感じで、その黄金の花は日中開き、夕方しぼむ（陽が照ると開き、曇ると閉じる）性質



がある。

山地の木陰などに自生し、茎は高さ十〜二十センチ、上部は分枝して無毛、地下茎から多数のひげ根が出る。基部の葉は膜質鞘状となり、正常葉は両面がほとんど無毛か、または裏面に小軟毛があり、互生して三〜四回羽状に細裂し、葉柄の下部は膜質で茎を包んでいる。花は黄色で直径三〜四センチ、がく片は数個で暗緑色を帯び、花弁はがく片よりも長く、二十〜三十個あつて、日中は平開する。雄ずいは多数、雌ずいも多数あり、そう果は広倒卵形で短毛があり、長さ三〜四ミリで先に短く外曲している。柱頭があり、染色体数は、 $n=12+20$ である。葉は人參の葉によく似ている。初夏の頃、地上部は枯れて夏の間、株は自然休眠する。十一月頃再び花芽を地上部に出しはじめる。関東以北に多く分布するが、四国・九州にも野生種がみられる。特に秩父地方では、桑畑に間作物として栽培され、東京方面に出荷されている。

園芸植物としての栽培は、江戸時代にすでに百二十余品種を数えたといわれている。日本独特のもので、最近では、温室やビニールハウス・フレームなどで栽培しているところもある。根（塊茎）は強心剤として使われるが有毒であるので、勝手に煎じて飲んだりするのは、極めて危険である。

ふくじゅそうは、別名、元日草・朔日草・側金盞花ともいう。全国各地でいろいろの方言の呼び名がある。二、三記してみると、

ガンジツソウ 福島（相馬）

キンバイソウ 徳島（麻植）

チチマンチャク 秋田（鹿角）

マグサグ 岩手（丸戸）

マゴサグ 青森（八戸・三戸）

マンサグ 北海道・青森・岩手

われわれ人間は、誰しも幸福を願わぬものはない。新年にこの福

寿草を飾る家が多く見うけられるようになったのは、この植物の名前の縁起の良さを、わが身にも、わが家族にもという心や願いのあらわれてはあるまいか。

なにもなき床に置きけり福寿草

虚子

日のあたる窓の障子や福寿草

荷風

青丹よし寧楽の墨する福寿草

秋桜子

日の障子太鼓のごとし福寿草

たかし

妻の座の日向ありけり福寿草

波郷

福寿草抱きて帰る北風きたの中

旗夫

ある朝の窓に置かれし福寿草

翠風

二日早や馴染む湯宿の福寿草

〃

このように俳句にもよく詠まれ、親しまれている。

## 衝羽根

びやくだん科の落葉低木で、丸い実の先に四枚の葉状の苞がつき、羽子板でつく羽根によく似ているので、この名前がつけられたといわれている。山地に自生し、「胡鬼」の子または「はごの木」とも呼ばれる。こぎの子は羽子板の子





という意味で、子は羽子のこと、胡鬼は羽子板の略で、子木に胡鬼の当て字を用いたといわれている。新春にふさわしい名前なので、正月の茶花として喜ばれ、果実は正月の懷石料理の材料としてよく使われる。

山地の樹の間に生える半寄生の落葉低木で、根は他の樹木の根に寄生する。幹は直立し、高さ一・二・五メートルぐらい、盛んに枝わかれして葉を多くつける。葉は対生し、やや無柄、卵形または長卵形で、先端は長く尖り、下部はくさび形、全縁、緑色で、長さ二・八センチぐらい、雌雄異株である。初夏の頃、雄花が枝端に散房状につき、雌花は中央の花枝の先に一個だけつく。花は小形で淡緑色、がく片は四個で花弁はない。雄しべは四個で短い。雌花は子房下位、がく片の下に四個の小苞がある。果実は卵円形、あるいは橢円状円形で、長さ七・十ミリぐらい。果実の先端には、大きく成長して葉状になった線状皮針形の四個の苞がある。果実は塩漬にし、